

ブッシュ大統領と「アメリカ原理主義」

森 孝一

1. 私のアメリカ・キリスト教原理主義研究について
2. Evangelicals と Fundamentalists の意味は変化してきた
3. イラク戦争正当化の論理（大義）
4. 原理主義的「見えざる国教」（civil religion）（アメリカ原理主義）と超越的「見えざる国教」
5. ブッシュ大統領再選とアメリカ宗教の影響力
6. アメリカ・キリスト教のリベラル派はどうなっているのか？

1. 私のアメリカ・キリスト教原理主義研究について

私はこの20年間、アメリカ政治における宗教の重要性を主張し続けてきた。日本の学会もマスコミも、それをまともに取り上げてきたとは言い難い。しかし「9・11」以降、ブッシュ大統領が演説の中で宗教的言説（religious discourse）を繰り返していること、そして2004年秋のアメリカ大統領選挙において、宗教や価値観についての問題がブッシュ大統領の再選に大きな影響を与えたことが明らかになったことによって、日本でも「はじめて」アメリカ政治における宗教の重要性が認識されたと言えるだろう。

日本のマスコミは昨年の大統領選挙の結果についてのアメリカのマスコミ報道に影響されて、アメリカが突然、宗教的社会に

なったかのように報道している。しかし、これはアメリカ宗教の最近の変化の結果なのではない。現在のアメリカ政治と宗教との関係は、今から25年前（1980年）のレーガン大統領の登場時に起こった、アメリカ宗教の変化の延長上にあることを、まず指摘しておきたい。

私がはじめてアメリカの「キリスト教原理主義」について論文を発表したのは、今から21年前（1984年）である（拙論「ファンダメンタリストの政治化現象－1980年代の『新宗教右翼』の研究」、『同志社アメリカ研究』第20号）。この論文は、現在の「宗教右派」（Religious Right）の前身であった「新宗教右翼」（Religious New Right）を、日本に最初に紹介した論文であった。

まず、1980年の大統領選挙（レーガンの一期目）における、アメリカ宗教の変化について考えてみたい。この年の大統領選挙はJ・F・ケネディ大統領以降続いていた民主党の支配を覆すために、「保守大連合」が結成され、それが功を奏した選挙であったと言われている。連帯した保守勢力とは、1)伝統的保守主義、2)共和党のエスタブリッシュメント、3)今日注目されているネオ・コン（当時は国内問題に関心を集中さ

せていた)、4)ニュー・ライト(新右翼)、そして、5)新宗教右翼(宗教的ニュー・ライト)であった。

保守大連合を仕掛けたのは、Paul Weyrich, Richard Viguerie など、当時 30 歳代の若手の保守主義者によるグループの「ニュー・ライト」であった。彼らはコンピュータに納められた保守的な政治傾向を持っている人びとの名簿と、それを利用したダイレクトメール戦略という、それまでの保守主義者にはない斬新な手法を得意としていた。彼らがとくに選挙戦略の対象として注目したのが、アメリカ政治における「眠れる巨人」と言われていた「福音派」(Evangelicals)であった。

福音派は当時、伝統的に政治には無頓着であり、彼らのほとんどは投票に必要な選挙登録さえ行っていなかった人びとであった。その理由は、彼らのキリスト教理解に関係していた。彼らのキリスト教理解の一つの特徴は、差し迫った終末への信仰(前千年王国思想)であった。差し迫っている終末を文字通りに信じていた福音派のキリスト教徒たちにとっての関心事は、終末に備えることであった。終末とともに、現在の世界のすべてが再臨したキリストの裁きの対象となるのであり、現実社会を改革すること(政治)は、彼らにとっては何ら意味を持たない事柄であった。

アメリカ人口全体の約 40 パーセントを占めていたこの「眠れる巨人」に政治的意識を持たせ、選挙登録を行わせて政治の舞台に引っ張り出すこと。これが「ニュー・ライト」が考えた選挙戦略であった。

「ニュー・ライト」には保守派の人びとの住所録データ・ベースや、それまでの伝統的な保守主義者にはない斬新な選挙戦略はあったものの、彼らに欠けていたものがあった。それは、福音派の人びとの心をとらえることのできる「カリスマ」を持ったリーダーであった。そこで「ニュー・ライト」が目をつけたのが、当時、保守的な福音派の人びとの心をとらえていた「テレビ説教家」(TV preachers)と呼ばれるプロテストタントの牧師たちであった。

1984 年の拙論で主張したかったことは、1)1980 年の大統領選挙でアメリカの保守的プロテストタントが大きな影響力を発揮したこと。2)これはアメリカの保守的プロテストタントの変化の結果であったことである。その変化の内容とは、福音派の政治への参加(政治化)であった。

1984 年の拙論「ファンダメンタリストの政治化現象」を読み返してみると、私の「ファンダメンタリスト」という用語は不明確であったことが分かる。この場合の「ファンダメンタリスト」とは「保守的プロテストタント」という程度の意味で使っていたよ

うだ。アメリカにおける「保守的プロテスタント」をキリスト教理解（神学）によって分類すると、1) 宗教体験よりも、ファンダメンタルな（根本的な）教義内容を尊重する伝統的ファンダメンタリスト、2) 信仰的再生（born-again）の宗教体験を重視する福音派（Evangelicals）、3) 聖霊を受けることによって起こる、異言などの体に表れる印（しるし）を重視するペンテコステ派・カリスマ運動（Pentecostals, Charismatic movement）の3つのグループに分類できる。1984年の拙論では、この3つのグループを含めて、保守的プロテスタント教徒を「ファンダメンタリスト」と総称していたようだ。

この拙論で使用したアメリカで出版された当時の著書や雑誌論文（James E. Wood, Jr., “Editorial: Religious Fundamentalism and the New Right,” *Journal of Church and State*, 22, No. 3 (Autumn, 1980); George M. Marsden, *Fundamentalism and American Culture, The Shaping of Twentieth-Century Evangelicalism: 1870-1925*, Oxford University Press, 1980; Robert Zwier, *Born-Again Politics: The New Christian Right in America*, InterVarsity Press, 1982 など）を見ると、当時、アメリカにおいても「ファンダメンタリスト」という用語の意味は、まだ曖昧であったことが分かる。アメリカにおける研究者も、レーガン

大統領の選出に大きな影響を与えた保守的プロテスタント、すなわち「ファンダメンタリスト」のあり方が従来とは変わってきているということを認識していたが、未だはっきりとした定義を行うには至っていなかったと考えていだろう。

2. Evangelicals と Fundamentalists の意味は変化してきた

日本において Evangelicals という用語は、「福音主義者」あるいは「福音派」と訳されているが、その違いを意識して使用されている場合は少ない。注意すべきは、Evangelicals という用語がアメリカにおいては、時代によって異なった意味を持った用語として使用されてきたという事実である。本来、Evangelicals とは「宗教改革のキリスト教理解（神学理解）を継承している人びと」、すなわち「プロテスタント」と同義語であった。ドイツにおいては、「カトリック」（Katholische）に対する用語としての「プロテスタント」（Evangelische）を意味する用語であった。

後にアメリカ・キリスト教史において「ファンダメンタリスト論争」と呼ばれるようになった、19世紀末から20世紀初頭のアメリカ・キリスト教界における対立の時代には、まだ「ファンダメンタリスト」という名称自体が存在しなかった。のちに「フ

ファンダメンタリスト」と呼ばれる人びとも、またその対抗勢力であった「モダニスト」（近代主義者）と呼ばれる人びとも、自分たちこそ「真の Evangelicals（福音主義者）」であるとお互いに主張していたのである。

「ファンダメンタリスト」という名称が現れるきっかけとなったのは 1910～1915 年の間に出版された *The Fundamentals* という 12 冊のパンフレットであった。これらのパンフレットは、キリスト教信仰における「ファンダメンタルズ」（根本信条）について書かれた論文を集めたものであった。この一連のパンフレットに著されているような保守的な信仰理解を自分のものとしている人びとを「ファンダメンタリスト」と呼ぶようになったのである。

拙論「新宗教右翼の政治化現象」の翌年の 1985 年に、同志社大学神学部の紀要である『基督教研究』に、私は 52 頁にわたる長編の拙論「アメリカにおけるファンダメンタリズムの歴史」を発表した（『基督教研究』第 46 巻第 2 号）。

この拙論において私はまず、アメリカにおけるファンダメンタリズムの研究史を概観し、つぎに「神学運動」としての 1920 年代までのファンダメンタリズムの神学的特徴を明らかにした。それは 1) 「ディスペンセーションナリズム」（Dispensationalism）と呼ばれる終末思想としての前千年王国思

想（Premillennialism）と 2) 直解的（literal）な聖書理解である。社会・文化的には、それは「反近代主義」の民衆運動（populist movement）であり、ファンダメンタリストの攻撃の対象は、近代主義の象徴としての聖書の文献批評学（Text Criticism）と進化論であった。

第一次世界大戦を契機に、ファンダメンタリストによる批判と攻撃は、文献批評学よりも社会進化思想（Social Darwinism）へと向けられ、文明批評的傾向が強くなっていった。1925 年には、全米の注目を集めた進化論をめぐるスコープス裁判（Scopes Trial）が起こされたが、検事をつとめた元国務長官の William Jennings Bryan の主張の中心は、のちにナチス・ドイツへと凝縮していき、社会進化論的文明理解・歴史理解・人間理解に対する批判であった。

1960 年代以降に登場する今日の「福音派」（Evangelicals）は、同じ Evangelicals という用語によって自らを称していたが、その意味するところは、従来のこの用語の用法とは異なっていた。従来の Evangelicals はプロテスタント教徒全体を意味する用語であったが、「福音派」と翻訳されるようになる 1960 年代以降の Evangelicals は、当時のアメリカ・キリスト教界において主流派を占めていたリベラル派のプロテスタント教徒と自分たちを区別するために選択され

た用語であったことに注意する必要があるだろう。「スコープス裁判」の後に、ますます信仰理解において偏狭になり、セク特的性格を強めていた従来の「ファンダメンタリスト」から自らを区別し、より開かれた穏健な保守的プロテスタントであることを表現するために選ばれた用語。それが「福音派」(Evangelicals)であった。

1980年代以降のファンダメンタリストには、それまでのファンダメンタリストには見られない特徴が見られる。それは積極的な政治への参加であった。政治的目的を実現するために、神学理解の違いを超えて連帯するという態度は、それまでのファンダメンタリストには到底受け入れられないものであった。

1996年に出版した拙書『宗教からよむ「アメリカ」』(講談社選書メチエ)で、私はそれまでのアメリカ・キリスト教原理主義研究をまとめて整理した。そこでは、1980年代以降のファンダメンタリストをつぎのように明確に定義している。「今日のアメリカにおけるファンダメンタリストは、もはや神学的概念ではなく、モラル・マジョリティ(道徳的多数派)が代表していたような保守的価値観を共有している政治勢力である」(215頁)。

アメリカにおけるキリスト教原理主義者(宗教右派)と福音派との区別について、

G・M・マースデン(George M. Marsden)の定義を受け入れて「何かに怒っている福音派」と表現した。(See *TIME*, September 2, 1985, p. 50.) すなわち、宗教右派とはその怒りを政治の領域で表現しようとしている「政治化した福音派」であると言えよう。それでは、彼らは何に怒っているのか。1980年代の代表的な宗教右派の団体である「道徳的多数派」(Moral Majority)のパンフレットを見てみよう。これは今日の宗教右派に継承されているアメリカのキリスト教ファンダメンタリストの特徴をも表している。

「道徳的多数派」は、私たちの国家が道徳的に低下していることを憂慮しており、私たちの国家の基礎である伝統的な家庭と道徳的価値が、多くの不道徳な世俗的人間中心主義者(humanist)や自由主義者(liberal)によって破壊されつつある現実、嫌気がさしている。

私たちはアメリカ合衆国に道徳的健全さを取り戻すことを、唯一の関心とすることによって結び合わされている。

ここから読み取れる今日のアメリカにおけるキリスト教ファンダメンタリストの特徴は、彼らを一つに結び合わせているものは、キリスト教についての神学的理解では

なく、アメリカ社会の現状、とくに道徳的現状に対する危機意識と、それを政治的に改革しようとする意思であると言えるだろう。

1980年代以降の今日のファンダメンタリストの定義

今日の「ファンダメンタリスト」という用語は、神学者によって考察されたものではなく、マスコミによって作られものである。イラン・イスラーム革命（1979年）以降のイスラーム過激派に対して「イスラーム原理主義者」という呼称が一般的に使われている。これは明らかに西欧世界による「レッテル貼り」であり、イスラーム側からすると受け入れがたいことは十分に理解している。しかし、私はあえて「ファンダメンタリスト」という用語を用いることにする。その理由はつぎの2点である。1)「イスラミズム（イスラーム主義）」はイスラーム世界内部では適切かもしれないが、他の宗教伝統における同様の宗教運動には適用できない用語である。2)「宗教復興運動」

(religious awakening, religious resurgence)

は政治への積極的な参加という、今日のファンダメンタリストの最大の特徴を表すことができない。

ファンダメンタリストは、自分たちは真理を知っていると考える。その真理は単純

であり、聖書やクルアーン（コーラン）やグルの言葉の中に明白に示されている。すなわち、正典は解釈されることなく、文字通り直解的に信じるべきものである。このようにファンダメンタリストは、信仰理解において保守的な人びとである。しかしファンダメンタリストは、ただ個人的レベルでの信仰理解において保守的であるだけでなく、自分たちの保守的価値観を現実の政治において実現しようとする人びとである。

「政治参加」がファンダメンタリストと単なる保守的信仰者を区別するものである。政治への参加の仕方は、テロや戦争からアメリカの「宗教右派」のようなロビー活動まで、さまざまである。

このように考えると、イスラーム原理主義者はもちろんだが、ブッシュ大統領の文解明理解あるいはアメリカ理解もまた原理主義的である。すなわち、「9・11」とそれに続く現状は、「二つの原理主義」のあいだの対立・抗争として理解することができるだろう。それはイスラーム原理主義と「アメリカ原理主義」の対立である。

3. イラク戦争正当化の論理（大義）

「9・11」以降のアメリカの外交・軍事政策は、アメリカという帝国のまさに「死の政治学」に促されたものと理解することができる。それは第二の「9・11」が起こることへ

の恐怖心、死への恐怖心に発するものであった。対テロ戦争の戦場はアメリカ本土である。ブッシュ政権が国土安全保障省を新設したのは、まさにこのことの表現であったと理解していいだろう。アメリカ本土を戦場とする対テロ戦争は「9・11」当日から始まったのであり、今もアメリカは戦時下にある。これがアメリカ人の偽らざる心情である。この死への恐怖心は「愛国法」(Patriot Act)を成立させ、テロを予防するためには、個人の自由やプライバシーを侵すことも正当化している。

イラク戦争を正当化するアメリカの論理（イラク戦争の大義）は、アメリカ建国の大義と密接に関連している。少なくとも、アメリカ人はそのように理解している。アメリカ建国の意味、すなわち、アメリカが革命を戦い、独立を目指す意味を世界に向けて宣言した「独立宣言」の中心部分を見てみよう。

われわれは、次のような真理をごく当たり前のことだと考えている。つまり、すべての人間（all men）は神によって平等に造られ、一定の譲り渡すことのできない権利を与えられており、その権利のなかには生命、自由、幸福の追求が含まれている。

啓蒙主義思想の中心的理念である基本的人権の中心概念である、共和制（民主主義）と自由を世界において実現すること（普遍主義、グローバリズム）。それが国家としてのアメリカの存在理由であり使命（mission）である。ブッシュ大統領は演説の中で繰り返し、このことを述べているが、2003年1月18日の「一般教書演説」の最後の部分を引用してみよう。

アメリカ国民は、自由がすべての人びとの権利であり、すべての国家の未来であることを知っている。自由はアメリカが世界に対して与えるものではなく、神が人類に対して与えるものである。

アメリカ建国の理念である基本的人権の実現、基本的人権のなかでもとくに重要であるとされる自由を実現すること。それがアメリカが存在する意味であると言っても過言ではないだろう。この基本的人権としての自由を抑圧するもの、それが全体主義あるいは圧政である。国家としてのアメリカの存在意義あるいはアメリカの使命が、建国の理念である基本的人権を実現することであるとすれば、その実現を阻む全体主義あるいは圧政と戦い、その抑圧のもとに

ある人びとを解放することは、アメリカの使命であると理解することができるだろう。

今年1月20日に行われたブッシュ大統領第二期目の大統領就任演説においても、ブッシュ大統領は「自由」という言葉を40回以上、繰り返し使用した。「自由」とともに「圧政」(tyranny)に対する戦いについても繰り返し語られた。同日行われたライス新国務長官の記者会見においても、圧政との戦いがアメリカの使命であると表明された。

第一次世界大戦以降、イラク戦争に至るアメリカが戦った全ての戦争は、「圧政」との戦いであったとアメリカは理解していると言えるだろう。すなわち、第一次世界大戦はドイツ皇帝による全体主義に対する戦争であった。第二次大戦は、ナチス・ドイツ、ムッソリーニのイタリア、日本帝国主義という全体主義との戦争であった。朝鮮戦争とベトナム戦争では、共産主義という全体主義との戦争であった。そして、湾岸戦争とイラク戦争は、サダム・フセインによる全体主義との戦争であった。

大量破壊兵器がイラクにおいて発見されなかったことによって、イラク戦争は大義なき戦争であったという評価がなされている。しかし、少なくともアメリカは、大量破壊兵器の有無ではなく、圧政のもとで抑圧されているイラクの人びとを解放するこ

とが、イラク戦争の大義であると考えているのだということを、私たちは知る必要があるだろう。この点においては、アメリカは第一次世界大戦以来、アメリカが関わる戦争の大義については、全く一貫していると考えているのである。

4. 原理主義的「見えざる国教」(civil religion)(アメリカ原理主義)と超越的「見えざる国教」

"Civil Religion in America"(アメリカの市民宗教、あるいはアメリカの「見えざる国教」)は、宗教社会学者であるロバート・N・ベラ(Robert N. Bellah)が明らかにしたように、キリスト教とは極めて共通点を持った宗教ではあるが、同時に、キリスト教とは明らかに一線を画した、一つの個別の宗教である。一つ例をあげれば、キリスト教の信仰の対象であるイエス・キリストはアメリカの「見えざる国教」においては、重要な概念ではない。アメリカの「見えざる国教」は、多様な国民を統合することを第一とする宗教であるので、イエス・キリストを持ち出すことによって、イエスをキリスト(メシア、救世主)と信じないユダヤ教徒を排除することになるからである。イエス・キリストではなく、「聖書の神」がこの宗教の中心的概念である。「聖書の神」を信じている人びと、言い換えれば、「ユダ

ヤ・キリスト教的伝統」(Judeo-Christian Tradition)の宗教を信じている人びとは、アメリカ全人口の90%に昇るのである。具体的には、プロテスタント、カトリック、ユダヤ教、ギリシアあるいはロシア正教、モルモン教である。多様なアメリカ国民を統合することのできるシンボルで、「聖書の神」に代わることのできるシンボルは存在しない。

すべての宗教がそうであるように、アメリカの「見えざる国教」も原理主義的あり方と反原理主義的あり方をとる可能性がある。アメリカの「見えざる国教」における原理主義と反原理主義を理解するために、ブッシュ大統領とリンカーン大統領の場合を比較してみよう。この二人の大統領には共通点がある。それは二人がどちらも戦時下の大統領であり、結果的には、武力行使を選択したという点であろう。それでは両者の相違点はどこにあるのか。

「9・11」の当夜の演説以来ブッシュ大統領は二元論的に世界を理解し、アメリカはつねに正義であり、神はアメリカとともにあると繰り返し語ってきた。これに対して、リンカーン大統領は南北戦争開戦の年の1861年に行ったニュージャージー州議会での演説で、アメリカについて、“God’s almost chosen people”であると語っている。

この“almost”が意味するところは、きわめて重大である。リンカーン大統領は南北戦争における北軍の最高司令官でありながら、アメリカは無条件に神の側にあるのではなく、“almost”という言葉を挿入することによって、神の国と現実のアメリカを同一視することに対して、躊躇あるいは保留を表明したのであった。これはブッシュ大統領が「9・11」以降、一貫して二元論的な世界認識の枠組みの中で、アメリカを常に無条件的に神の側にあるものとして表明していることと比較すると、極めて特徴的であると言えるだろう。すなわち、ブッシュ大統領は原理主義的「見えざる国教」(American Civil Religion)を代表し、リンカーン大統領は反原理主義的(あるいは超越的)「見えざる国教」を代表していると考えることができるのではないだろうか。

原理主義と偶像崇拜

アメリカの「見えざる国教」だけでなく、いかなる宗教も原理主義となる可能性と、反原理主義となる可能性を併せ持っている。中東生まれの三つの一神教(セム的一神教、あるいは「アブラハムの宗教」とも呼ばれる)においては、私が「原理主義」と呼ぶ宗教の在り方を、「偶像崇拜」として定義している。

ユダヤ教とキリスト教が信仰の根本とし

て重視している「十戒」の第一戒には、つぎのように記されている。「わたしをおいてほかに神があつてはならない」。それではイスラームの場合はどうか。イスラームのもっとも重要な信仰告白は、「アッラーフのほかに神なし」である。この二つの教えは、自分の神だけが正しいということを表現しており、原理主義的あり方を示しているように読めるかもしれない。しかし、この二つの教えが共通して示そうとしている信仰の根本は、「絶対なるもの」は「神」のみであり、その「神」を信じる人びとが形作る宗教も宗教理念も、国家も国家理念も、すべては絶対的ではないという主張である。すなわち、「神」以外のものを神とすることは偶像崇拜であり、一神教においてはもっとも忌むべき事柄であるということであろう。

原理主義者の誤りは、「神」と自分たちの宗教を混同し、あるいは国家と「神の国」を混同しているところにあると言えるだろう。このように原理主義を理解すると、「9・11」とその後のアメリカの対応は、実は二つの原理主義の対立として理解できるのではないだろうか。それは国家としてのアメリカを「神の国」と同一視する「アメリカ原理主義」と、自らのイスラーム理解を絶対であるとする「イスラーム原理主義」との対立である。

ブッシュ大統領の演説の中にも、反原理主義的で超越的なアメリカの「見えざる国教」の要素を見ることができる。「9・11」一周年行事の最後に、エリス島から国民に向けて語られた演説を紹介してみたい。

アメリカへの攻撃は、アメリカを国家として成立させている理想に対する攻撃であった。その理想とは「自由と平等」であり、それが存在しているかどうか、いま戦っている敵とアメリカとの最大の相違である。この自由と平等を私たちに与えたのは創造主である。・・・私たちはイスラームの信仰を尊重する。しかし、その信仰を歪めて行動する者には私たちは戦う。・・・私たちの国家は強力である。しかし、私たちの大義は国家よりも偉大である（Our cause is even larger than our country）。その大義とは、人間の尊厳であり自由である。このアメリカの理想はすべての人類の希望である。これらを得ようとする希望が、何百万人もの人びとをこの港（ニューヨーク港）に引き寄せた。希望の光は、今なお、私たちの道を照らしている。光は闇のなかで輝いている。そして、闇は光に勝つことはない。神よ、アメリカを祝福したまえ。

現実のアメリカよりも偉大な「大義」が存在している、すなわち、現実の国家としてのアメリカを超越する理念や価値が存在しているというこの言葉は、国家としてのアメリカを偶像化することを批判する超越的（反原理主義的）「見えざる国教」を想起させるものである。問題は、スピーチライターが書いたこの言葉が持つ重要性を、ブッシュ大統領自身が理解していたかどうかではないだろうか。

5. ブッシュ大統領再選とアメリカ宗教の影響力

2004年11月3日の大統領選挙の出口調査で、「どの問題で、あなたは投票を決めたか」という質問に対して、「倫理・価値観・宗教」が22%で、イラク戦争や経済問題を上回って第一位となったことはアメリカのマスコミを驚かせ、それが日本のマスコミをも混乱させた。

今回の大統領選挙の一つのポイントは投票率であると私は予想していた。前回の投票率は51%だったが、今回は60%に達した。投票率が上がると宗教右派などの固定票の影響力が弱まるのが通常である。投票率が上がれば、民主党に有利であると予想されていた。ところが結果は、共和党ブッシュの勝利となった。民主党はヒスパニック系移民を中心に票の掘り起こしを行ったが、

共和党も福音派の票を前回以上に掘り起こすことに努力し、選挙後の分析では、前回は上回った投票率分の票を民主党と共和党がほぼ折半したと言われている。民主党の読み違いの一つは、民主党が頼りにしたヒスパニック系移民の投票率の上昇は、民主党有利には働かなかったという現実である。実は、ヒスパニック系移民は宗教的であったのだ。激戦州の一つであったフロリダを含む南東地域を担当した共和党の選挙対策責任者ラルフ・リード（Ralph Reed）はかつて宗教右派の中心的組織であった「キリスト者同盟」（Christian Coalition）の総幹事をつとめた人物であった。彼は中絶問題や同性愛結婚の合法化という宗教的・倫理的問題を選挙の争点として、信心深いヒスパニック系移民の票を獲得することに成功したのである。

2004年5月の危機

大統領選挙の期間中、2004年5月にブッシュ大統領は最大の危機を迎えていた。イラクのアブグレイブ収容所での虐待事件は、イラク戦争の大義を揺るがす大事件であった。全体主義の抑圧のもとにあるイラクの人びとを解放すること。すなわち、イラクに自由と人権をもたらすことが、アメリカにとってのイラク戦争の大義であった。そのイラクのアブグレイブ収容所において、

アメリカ軍兵士による人権を無視した虐待が行われていることが明らかにされたのである。ブッシュ候補は最大の危機を迎えていたに違いない。

しかし、民主党のケリー候補とその陣営は、アブグレイブ収容所での虐待事件を取り上げてブッシュ候補を批判することをしなかった。戦時下での大統領選挙において、この問題を取り上げることによって、アメリカ世論の反発を買い、票を失うのではないかという危機をもったのであろう。ケリー陣営は判断を誤った。アメリカにとってのイラク戦争の大義から、虐待事件を批判し、逸脱を改めて本来のアメリカの理念を実現するように主張すべきであった。それはどちらの候補に投票するかを決めかねていた人びとに、ブッシュ候補ではなくケリー候補が、アメリカが目指すべき理念を実現しようとしていることを実感させる結果になったに違いない。

ケリー陣営がブッシュ批判を躊躇している間に、すなわち、アブグレイブ収容所での虐待事件の1週間後に、ブッシュ候補にとって、とてつもない大きな「追い風」が吹いたのである。ケリー候補が上院議員をつとめていたお膝元のマサチューセッツ州で、同性愛結婚が合法化され、同性愛者カップルの結婚届が州政府によって受理され始めたのである。ブッシュ候補はすぐにこ

の問題へと争点を移して、ケリー候補を徹底的に批判した。ブッシュ候補は、どのようなリベラルな裁判官も同性愛婚を合法とする判決を出すことができないように、結婚は男女の間で行われるべきものであるという内容の合衆国憲法の修正条項案を提出することを表明した。これに対して、ケリー候補は個人的には同性愛結婚に反対だが、憲法修正には反対し、それぞれの州の判断に任せるべきであると表明した。民主党大統領候補のケリーにとって、中絶は女性の権利であり、同性愛結婚は認められるべき結婚形態の一つであるとするリベラル派の人びとは、大きな支持母体であった。同性愛婚に反対すれば本来の支持母体からの支持を失い、賛成すれば巨大な票田である福音派の票を失うという状況の中で、ケリー陣営は何ら有効な選挙戦術を打ち出すことができないまま投票日を迎えたのであった。

アメリカ世論の中道は信心深い

今回の大統領選挙の結果を左右したのは、アメリカ世論の「中道」の動向であった。問題は、アメリカ世論の「中道」について、民主党と共和党は異なった読みを行っているものであり、結果的には、民主党の読み間違いが選挙の敗北をもたらしたと言えるのではないだろうか。民主党の読み違いとは、

「アメリカ世論の中道は、実は、信心深い人びとである」という現実についての読み違いであった。

私は今回の大統領選挙の結果を左右する決定的な役割を果たしたのは、「穏健な福音派」であったと考えている。選挙後の分析によれば、ケリー候補は福音派の20%の票を獲得するに留まった。これを1996年大統領選挙のクリントンの場合と比較してみよう。クリントン候補は福音派の約35%を獲得し、再選を勝ち取ったと言われている。激戦が予想されていた今回の選挙において、大票田である福音派の票を十分に獲得できなかったことは、大きな敗因となったと言わざるを得ない。

この分析結果から、福音派についてのいくつかの傾向が読み取れる。一つは、福音派の全体が共和党支持ではないという点である。クリントンの選挙と比較すると大きく減少したとはいえ、ケリー候補は福音派の20%の票を獲得したのだ。すなわち、福音派は「一枚岩」ではないということだ。

それではいったい、福音派と呼ばれる人びとは有権者の何%を占めているのだろうか。ある研究者は25%程度であると分析しているが、40%であるという分析もある。いずれにしても、少なめに計算しても、全有権者の4分の1を占める大票田であることに間違いはない。私は40%であると考え

ている。理由は、ギャラップ世論調査機関をはじめとする信頼の置ける世論調査機関による調査結果である。少なめに判断している調査結果は、リベラル派の傾向を持っている大学などによって行われた世論調査であることが多いように思われる。

ギャラップ世論調査機関による福音派に関する世論調査では、毎回、全有権者の40%あるいはそれ以上が福音派であるという結果となっている。昨年の大統領選挙の約2ヶ月前の昨年9月に行われた、「進化論」をめぐるギャラップ世論調査機関の調査結果を紹介してみよう。質問は、「人間はより下等な生物から進化した」と考えるか、それとも「人間は神によって人間として創られた」と考えるか、というものであった。調査結果は、進化論を信じる人が51%であったのに対して、人間は神によって人間として創造されたと答えた人びとは45%であった。聖書を文字通り事実として受け入れ、解釈なしで信じるという聖書理解（直解的聖書理解）は、福音派の一つの特徴である。進化論を認めず、聖書の神による創造を事実として受け入れる人びとが45%に達したという世論調査結果は、福音派の規模を有権者の40%とする判断を補完するものではないだろうか。

福音派は「一枚岩」ではないということ、を、もう少し詳しく分析してみよう。すな

わち、福音派の中に「穏健派」と「過激派」が存在しているということである。福音派の中の「過激派」、それが宗教右派と呼ばれる人びとである。彼らはいわゆる「シングル・イシュー」（単独の政治問題）によって投票を決定する人びとであり、今回の大統領選挙においては、中絶問題と同性愛婚の合法化という「単独のイシュー」によってブッシュ大統領を支持した人びとである。彼らの勢力は、全有権者の15～18%であると言われている。これはアフリカ系アメリカ人（12%）を越えるものであり、しかも、彼らが必ず投票に行くだけでなく、積極的に選挙活動を行う人びとであることを考えると、とてつもなく大きな政治的影響力を持った政治組織であるという事実は否定できない。

しかし、福音派全体は有権者の40%であるが、福音派の中の過激派である宗教右派（キリスト教原理主義者と同義語）は15%であるということは、残りの有権者の25%を占める福音派は「穏健派」であるということであろう。それでは、穏健な福音派とはどのような人びとなのだろうか。彼らは外交問題においては、必ずしもブッシュ大統領を支持しているわけではない。イラク戦争よりも、より重要な、アメリカが取り組むべき外交課題があると考えている人びとである。例えば、世界における貧富の差

の問題、あるいは、アフリカにおけるエイズをどのように克服するかという問題は、イラク戦争よりも優先すべき外交課題であると考えている人びとである。先ほどの、アブグレイブ収容所での虐待事件については、ブッシュ政権の対イラク政策を批判する人びとであろう。しかし、それでは彼らは信心深い人びとではないのかというと、まったく正反対で、極めて信心深い人びとである。とくに今回の選挙で問題になった、同性愛や中絶の問題においては、福音派は「一枚岩」なのだ。昨年5月のアブグレイブ収容所での虐待事件の直後に、マサチューセッツ州で同性愛婚を合法とする決定がなされたこと、それをブッシュ候補がすぐにケリー候補批判の中心に据えることによって、最大の危機を脱出することに成功したことの背景には、このような福音派の現実が存在していたのである。ケリー陣営は中絶や同性愛婚とは別のテーマを訴えることによって、穏健な福音派の票の獲得を目指すべきであった。しかし、現実には、民主党は穏健な福音派へのアプローチについては、ほとんど何も行わなかったようだ。現在、民主党は福音派の票をどのように獲得すればいいのかを真剣に考え始めているようだ。これに成功しなければ、政権奪回は不可能であろう。

6. アメリカ・キリスト教のリベラル派はどうなっているのか？

アメリカにおけるキリスト教徒の割合は、全人口のほぼ 80%である。内訳はプロテスタントが 55%、カトリックが 25%である。今回の大統領選挙結果の分析において、しばしば指摘されたことの一つは、「アメリカが二分されている」という現実であった。分裂の原因は、人種や政治的立場の違いではなく、価値観と文化の違いであると言われている。この分裂は「文化戦争」(Culture War)と呼ばれている。

アメリカ社会がほぼ価値観によって二分され対立しており、またアメリカ全人口の 80%がキリスト教徒であるということを含めて考えると、アメリカのキリスト教徒自体が、価値観を巡る「文化戦争」によって二分されているということであろう。このアメリカ・キリスト教の分裂は、いずれかの教派が「文化戦争」の片方の陣営を構成するというものではない。個々の教派の内部において、「文化戦争」が存在しており、教派そのものが「文化戦争」によって二つの陣営に分裂しているのである。民主党のケリー候補はカトリック教徒であった。それでは、ケリー候補は有権者の約 4 分の 1 を占めているカトリック教徒の票のほとんどを獲得できたのかというと、まったくそうではなかった。ケリー候補が獲得するこ

とができたカトリック票は 50%に留まった。カトリック教会が「文化戦争」によって二分されていることが、あらためて確認されることとなったのである。

アメリカ・キリスト教界自体がほぼ真っ二つに分裂しており、その片方が福音派を中心とする保守的キリスト教徒であるのなら、もう半分の勢力であるリベラル派のキリスト教徒たちは、いったいどこでどうしているのだろうか。勢力図においては、ほぼ半数を占める彼らは、なぜ有効なブッシュ大統領批判を行うことができていないのだろうか。

私はアメリカ・キリスト教におけるリベラル派が弱体化している原因として、二つの原因を想定している。一つは、「9・11」のショックである。本論で先述したアメリカ本土を戦場とする対テロ戦争への恐怖心、第二の「9・11」が起ることについての恐怖心である。これはアメリカ以外の国民には、なかなか理解することが難しいことではあるが、アメリカ国民のほぼ全員が共有している感情であろう。リベラル派もこの点においては例外ではない。先制攻撃によって第二の「9・11」を防げるとは、多くのアメリカ国民は思っていないだろう。それでは先制攻撃を行わなければ、第二の「9・11」は防げるのか。この点についての不明瞭さが、リベラル派のブッシュ大統領批判を鈍らせ

ているのではないだろうか。

アメリカ・キリスト教のリベラル派を弱体化させている第二の要因は、ブッシュ大統領によるリベラル派に対する巧みな「飴とムチ」による押さえ込み戦略の成功である。「ムチ」とは対テロ戦争の戦時下であるという理由から、盗聴を含む明らかな人権侵害を正当化する「愛国法」(Patriotic Law)の制定とその実施である。私が昨年9月にサンフランシスコでインタビューしたイスラーム団体のリーダーによれば、アメリカのイスラーム教徒は、図書館でどのような本を借りているかまで調べられ、情報機関の監視下に置かれているという。リベラル派の活動は徹底的に監視されており、政府批判を行うことが極めて困難な「警察国家」的な状況が存在しているのである。ブッシュ政権による対リベラル派戦略の「飴」の部分とは何か。これについても、昨年9月に行ったサンフランシスコでの調査について紹介したい。

サンフランシスコのダウンタウンにある「グライド合同メソヂスト教会」(Glide Memorial United Methodist Church)は、1970年代から全米でもっともラディカルな教会として有名であった。グライド教会は黒人教会のような強烈なリズムの音楽を用いた魅力的な礼拝で有名であるが、同時に、礼拝においてアメリカの国内問題や外交問題

を厳しく批判する点でも、また有名な教会であった。

私は「9・11」が起こった2001年以来、ほぼ毎年、「9・11」前後のグライド教会の礼拝に出席しているが、礼拝で語られる説教を聞いていて違和感を感じていた。それは、性差別や人種差別など、アメリカ国内の不正に対しては厳しい批判が行われる一方で、アメリカの対イラク政策やグローバル戦略についての批判が、まったく行われないうことについての違和感であった。

昨年9月の調査において、この点について、グライド教会の3人の牧師に直接、疑問をぶつけてみた。そのうちの一人、日系アメリカ人の女性であるジェニス・ミリキタニ(Janice Mirikitani)は、ブッシュ政権による「信仰に基盤を置いた福祉活動支援策」(Faith based Initiative)の影響について、正直に語ってくれた。これは地域社会への社会活動を行っている宗教組織(教会など)に対して、政府は財政的支援を行うという内容の政策である。宗教組織に税金を投入するというこの法律については、政教分離違反ではないかという批判があったが、ブッシュ大統領の強い指導によって成立を見たのであった。グライド教会はホームレスの人びとに対して、一日に3000食の無料の給食を提供している。また、教会周辺の地域のドラッグ依存症患者に対するリハビリ

リ・プログラムも実施している。これらのグライド教会の社会福祉活動に対して、多額の政府資金援助が給付されている。ミリキタニ氏はこの政府からの補助金を教会が受けていることにより、政府批判の矛先が鈍っている事実を正直に認めた。ブッシュ政権のキリスト教リベラル派に対する「飴とムチ」戦略は、リベラル派の政権批判を押さえるために、かなり有効に機能していると考えていいだろう。

ブッシュ政権のグローバル戦略を批判することは容易である。しかし、その批判によって、ブッシュ政権の外交政策やグローバル戦略の内容を変化させることができるのだろうか。アメリカはその外交戦略を変えるべきであることは事実であろう。しかし、アメリカを変化させることができるのは、アメリカだけである。もしそうであるとするなら、アメリカ以外の地域で生活している私たちにできることは何なのか。それは、アメリカのリベラル派と連帯し、彼らを支持することであろう。そのために、何ができるのかについて、現実的で、具体的な対応を考えることが重要ではないだろうか。